

# 次郎長

次郎長翁を知る会  
会報 第11号  
平成11年6月12日発行  
発行所 清水市島崎町6-25  
〒424-0823 清水市観光協会内  
TEL (0543) 54-2420  
発行人 竹内 宏  
題字 田口 英爾  
編集人 田口 英爾  
印刷所 (株)ニシガイ  
TEL (0543) 52-2188

## 船宿「末広」の所在地わかる

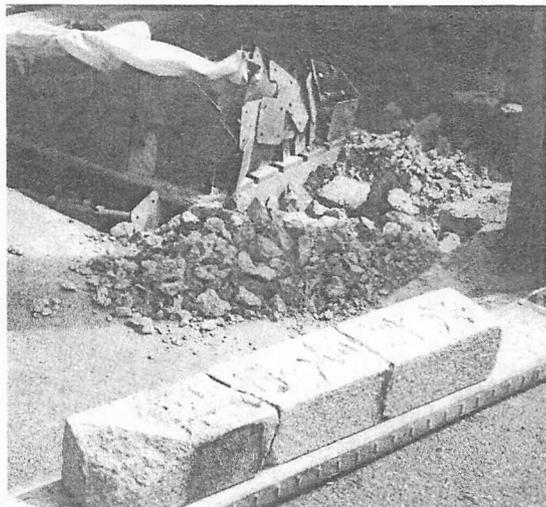
明治二十年代、若き海軍士官候補生広瀬武夫や小笠原長生らは、次郎長の武勇談を聞くため船宿末広を訪ねた。清水港波止場にあったその末広の場所や、慶喜撮影の写真に写されていることがわかった。

次郎長が晩年営んだ船宿「末広」の場所がどこにあって、どんな建物だったかについては、次郎長研究家ばかりでなく、およそ次郎長ファンといわれる大勢の人びとの関心の的であった。ところが場所についても、かつて波止場と呼ばれていた、三保行の渡船場や魚市場の附近にあったらし



平成十一年六月十二日に除幕される碑の裏面

いという程度にしかわかっていなかった。その付近は今も埋立てられ陸地と化してしまっており、日の出地区再開発という名称のもとに、人工浜辺や、遊歩道や新しいビルなどがつくられて、この十年程の間にすっかり姿が変わってしまった。一昔前まで、アオキトランスの本社ビルの前に小さな花崗岩の石碑が立っていて、それには「次郎長宅跡」と彫られており、通りがかりの人たちに「ああここに末広があったのだな」と納得を行かせていた。ところが、アオキトランス本社が新しいビルに移転するため、古いビルが取りこわしとなり、石碑も同じ運命になろうとしていた。編集者がたまたま通りかかった所、石碑はちょうど交通事故の負傷者のように、道路わきに横たわって、何処へか連れ去られそうになっていた。間一髪という形で、石碑は梅蔭寺まで運ばれ、次郎長銅像前の境内の一角に保存されることになった。もっともその石碑は倉庫出入のトラックなどに何

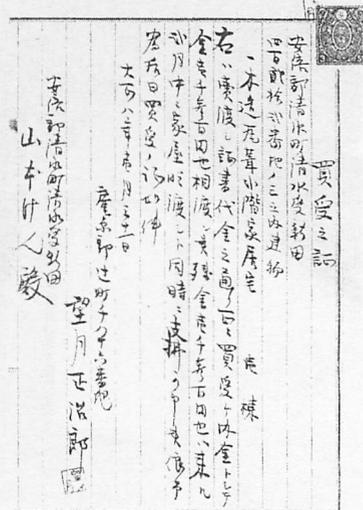


昭和三十年代からアオキトランス本社前にあった碑。アオキトランスビル移転に伴い撤去。平成十年九月撮影。

度もぶつけられたらしく二箇所ばかり折られた箇所をセメントで貼り合わせた処置がしてあり、満身創痍といった姿になっている。とてもこれでは、「次郎長宅跡」の石碑として再び御用をとめることはできない姿だ。

ところで数年前から市の日の出開発室から話が持ち込まれ、この地区に史跡記念碑をつくるというので、にわかに「末広」にスポットが当てられ、新しい「次郎長宅跡」の石碑がつくられることになった。

新しい石碑をつくるについては、是非にも末広の場所を特定しなければならぬ。建碑の話が具体化したのは昨年(平成十年)秋口くらいのこと



大正八年一月三十一日の買受証

であるが、編集子はず「場所の特定」にとりか  
 かるうとした。といっても手がかりらしいものは、  
 あまりない。編集子がかつて次郎長研究家の亀山  
 庄吉氏に教えていただいたことがある。次郎長通  
 りで洋品店を営んでいた氏は、明治三十八年生ま  
 れ、すでに故人となられたが、生家は次郎長が養  
 子に行った米穀店甲田屋の隣で、次郎長について  
 は生字引のように詳しい。

明治生まれの亀山氏から編集子は、末広が二階  
 建であったことや、末広という大きな字が羽目に  
 書いてあつて出入りする船からよく見えたことな  
 どを教えていただいた。また、今は埋立てられて  
 しまつてはいるが、かつての魚市場や渡船場のあつ  
 た船着場の石堤は、明治の築港時代からそのまま  
 の石堤であることなども教示いただいた。

問題の末広の場所については、大正初期の波止  
 場の写真を見ながら、だいたいこの辺だろうとい  
 う見当も亀山氏がつけた。

昨年秋、手がかりをつかもうと、手もとにある  
 色々な古い資料に当たつてみた。梅蔭寺次郎長資  
 料室を編集子は所管しているから、次郎長に關す  
 る原史料が手もとにいくつもある。先年、おちよ  
 うさんの子孫の入谷家から、明治期の史料を寄贈  
 していただいでおり、その中に次郎長宛の手紙が  
 いくつもある。その宛名で所番地がわかれば、末  
 広の特定ができるであろう。ところが幾つかある  
 手紙の宛名は、すべて「清水港波止場」で番地な  
 どは入つていない。これでは特定の手がかりにな  
 らない。

そうこうしている時、手にした二つ折の和紙の  
 書類を広げたところ、墨の跡もまだ新しいような  
 文字が目飛び込んできた。

「買受之証」「大正八年一月三十一日」と日付  
 の入つたその書類は「末広」の土地建物の譲渡証  
 書であつた。

「買受之証」と記載された物件の所在地は、  
 「安倍郡清水町清水受新田四百二拾二番地の三  
 の内」となつてはいる。

当時の地図を広げてみると、清水受新田四百二  
 十二番地の三（現在の港町）は、かつての清水波  
 止場の魚市場から青木運送（アオキトランス）に  
 かけての土地である。かなり広い区画の中の一画  
 に、末広はあつたのだ。

これで大体の場所の特定はできる。

もう一つ私の行き当たつた物証は、次郎長の持  
 家が売りに出されたという古い新聞記事である。  
 清水港はあの茶っ切り節でうたわれるように、  
 「お茶」のみなどである。「お茶」と並んでもう

清水港 次郎長自筆 喧嘩帳 (一) 売られた其舊家

刀銃のやうな帳の中を結んだ帳

大正十二年六月四日の中外商業新報。写真説明に「売られた次郎長の家」とある。

一つの重要品目は「ミカン」であつた。その「ミ  
 カン」輸出のバイオニアだつたのが「スイチ」の  
 屋号で知られる望月兄弟商會で、先年、望月一平  
 さんの手で「スイチ」の社史「オレンジキング」  
 が出版された。編集子は「清水港開港一〇〇年史」  
 の編纂を静岡県から委嘱され、平成十年から取り  
 かかつていたのだが、「ミカン」輸出について書  
 かれた望月兄弟商會の社史「オレンジキング」を  
 拾い読みしていたところ、一つの記事に目を引か  
 れた。

それは大正十二年六月四日の「中外商業新報」  
 の記事を抜すいしたもので記事中写真の見出しに  
 「売られた次郎長の家」とうたわれ、不鮮明だが、  
 一枚の写真が添えられている。

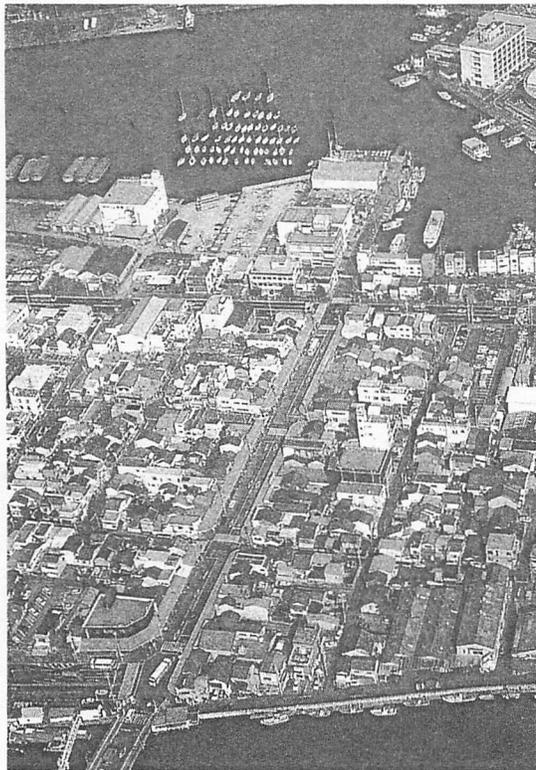
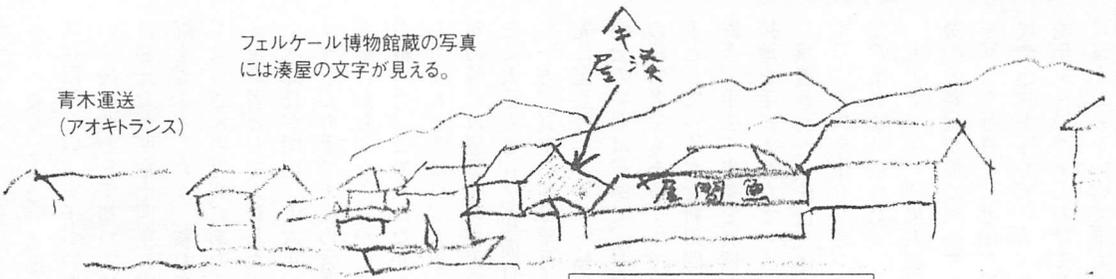
木造二階建のその建物の写真を見て、「あ、こ  
 れだな」と私は合点が行つた。それは大正初期の  
 清水波止場を写した写真、税関や魚市場と並んで

大正時代の清水波止場



フェルケール博物館蔵の写真  
には湊屋の文字が見える。

青木運送  
(アオキトランス)



昭和63年の港町附近。  
「清水波止場」としてある所が、かつての清水受け新田422-3番地。左の写真と付図は「空から見たふるさと清水」より。

いる建物の中にある二階建の家の一つに合致するものであった。

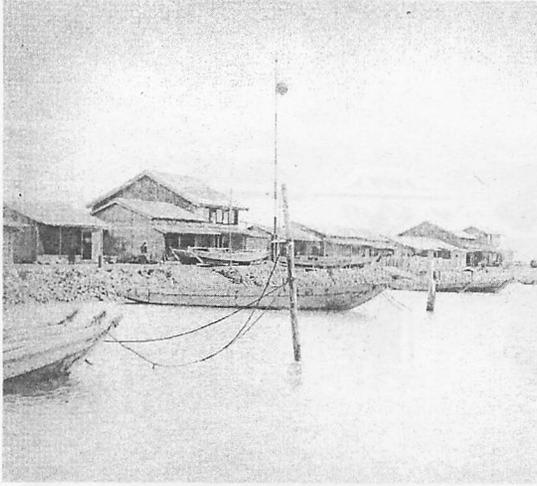
しかも魚市場に隣り合わせたその二階建の所番地は、「清水受新田四三二一三」に合致する。私は念のために、明治二十年代に撮ったとされる徳川慶喜の「清水港」の写真と取り出してみた。徳川慶喜と次郎長については、私はこれまで何度も両雄が出会った可能性について雑誌などに書いた。慶喜が静岡在住中の三十年間、実に頻繁に清水港を訪れたことは「家扶日記」が裏付けており、その身辺警固を次郎長が新門辰五郎から託されていたことや、榎原喜佐子著「徳川慶喜家の子ども部屋」に慶喜の子慶久の幼い頃、次郎長が「よいお子だ、よいお子だ」といって頭をなでたことが記されている。いろいろな情況証拠から慶喜と次

郎長の出会いの可能性は高いし、慶喜撮影の写真の中に、次郎長の家があったとしても、けっして不思議ではない。

不思議ではないどころか、慶喜撮影「清水港」の写真の中に次郎長の宮んだ波止場「末広」が写っている可能性は高い、と編集子は考えていた。

果して、慶喜の写真の中に、二階建のその建物は写されていた。繰り返すことになるが、慶喜撮影の「清水港」は二点あり、いずれも築港初期の漁村のような光景であるが、その一点の方の画面中央左寄りに写されている二階建の家が、正しく中外商業新報の「売りに出された親分の家」の二階建と同一の建物だったのである。

再び「買受之証」の記載事項にもどうう。売主の「山本けん」という名は三代目おちよう



徳川慶喜撮影「清水港写真」より

さんの養女である。次郎長には実子がなく、(桜井初四郎という実子がいたのだが、入籍していない)後継者として初め大政(山本政五郎)を養子に迎えたが明治十四年に没。その後、愚庵天田五郎を養子としたが、離れて僧侶となったため、おちようさんの近親にあたる「けん」女を養女に迎えた後継者として入籍した。

次郎長が明治二十六年、亡くなった後も、おちようさんの手で末広の営業は続けられたが、大正五年におちようさんが亡くなると、後は山本けんが継いだ。この人はなかなか美人で波止場のおけんちゃんと呼ばれ、大正六年、咸臨丸事件五十周年の時には慰霊祭の寄附金集めなどに奔走していた(大正六年「月心和尚日記」)。

一方、買主の名は望月正治郎とある。この人は先に記した「ミカン」輸出のパイオニア望月兄弟商会のいわば総師で、青木運送(アオキトランス)の経営者でもある。すでに青木運送は回漕業の大手として「清水受新田四二二三」の地に本社を置き、手広く事業を展開していたから、いわば隣接地を手に入れたということになる。

譲渡された末広は「湊屋(後に港屋)」という屋号に看板を塗りかえ、望月一族の手で船宿として営業が続けられた。

大正十二年、関東大震災の直後、清水港には大勢の避難民が船でやってくるが、その上陸の光景を写した写真に、港屋の屋号を大きく書いた二階建の建物が写っている。この港屋こそ、次郎長が晩年を送った末広の歴史を、今に伝える物証写真にほかならないのである。

## 編集室から

・会報十一号をお届けします。例によって夜なべの追い込み仕事で、何とか総会に間に合わせました。編集子は目下県から委嘱された「清水港開港一〇〇年史」の編集が大詰に近づき、これが終われば何とか県案事項に取りかかることができそうです。

・県案事項といえは、伏谷如水ゆかりの市原市との交流は、できるだけ早く実現したいものです。ご子孫の市原市在住高石鶴子さんから、地元では市長さんはじめ大勢の方がたが清水からの来訪を待ち望んでいるとのこと。秋には次郎長ツアーを組む予定。

・開港一〇〇年と同時に、今年はその広沢虎造師の生誕一〇〇年に当たります。そこで当会と清水港開港一〇〇周年の会共催で、「よみがえる虎造節」をメインに、次郎長と清水港の夜明け―咸臨丸事件―をしのぶ「浪曲と講談の会(仮称)」を催すこととしました。

時は平成十一年九月十八日(明治元年、咸臨丸殉難者命日)、所は開港一〇〇年で新しく建てられる日の出埠頭の清水マリントーナメントです。ご期待下さい。

・五月十三日に行われた竹内会長の横浜での経済講演会の席で、大勢の横浜市民の方が当会に入会して下さいました。また竹内会長を通じ東京の井上和子さんから多額の御寄附を頂きました。改めて心から御礼申し上げます。(田)